

モトコー五カ  
MOTOKO FIVE

毎日が掘出市で一す!!  
元町高架通商店街

MARUMO

# ベンチャーたちの時代

—兵庫がはくくんだ進取の精神—

戦後闇市としてにぎわった通称「モトコー」で創業間もない時代を振り返るアシックスの鬼塚喜八郎（故人・中央）とノーリツの太田敏郎（左）、田崎真珠の田崎俊作（故人）の各氏  
=2007年2月、神戸市中央区  
（写真はいずれも神戸新聞提供）

試作品をつくる厨房で総菜を前に語るロック・フィールド会長の岩田弘三氏



創業時のブランド「オニツカタイガー」の復刻など、ブランドを世界で展開するアシックス社長の尾山基氏



時代に挑み、閉塞状況を打ち破り、新しい価値観を生み出す。兵庫にはフロントランナーの伝統がある。戦前の大商社、鈴木商店が世界に雄飛し、戦後はダイエーが流通革命を巻き起こした。その後もアシックス、ノリツ、ワールド、田崎真珠、ロック・フィールド、エーデルワイス、トリドルなどが次々と新しいビジネスを生み出してきた。「地縁血縁のしがらみがなく、新しく来た人たちのバイタリティーが街の性格を形成した。最も原始的な形で資本主義が生まれた所。だからクリエイティブな人材を輩出できた」。作家城山三郎の分析だ。巨大都市東京は今、全国各地からヒト・モノ・カネを飲み込み、膨張し続けている。目を凝らすとあちこちに兵庫企業の進取のDNAが見えてくる。

(神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員・加藤正文)

## フロントランナー

「この靴は新たなベンチマーク(基準)になる」。2015年11月、東京都内であったアシックス(神戸市中央区)の次世代ランニングシューズ発表会。報道陣の前にグローバルブランドマーケティング統括部長のP・マイルズ(41)が力説した。

創業者鬼塚喜八郎(故人)の起こした神戸企業は今、世界をうかがう。ナイキ、アディダスには及ばないが、業界3位のプーマに追いつく勢いだ。会場には陸上男子の桐生祥秀(19)＝東洋大Ⅱの姿もあった。東京五輪・パラリンピックを飛躍の機とみて、東京で着々と布石を打つ。

社長の尾山基(65)は言う。「グローバルに活動しているが、東京は(衣食住の)ファッションの情報量が多く、圧倒的に有利だ」

戦後、兵庫の気鋭の経営者らは多彩な生活文化産業を生み出してきた。フロントランナーは第1世代から第2世代へ移りつつある。先頭を

行く一人が尾山だ。創業者鬼塚の女婿。日商岩井(現・双日)を経て、1982年に入社以来、義父から学んだ「起業家精神」はしっかり受け継がれている。

東京圏(東京都、埼玉、千葉、神奈川県)が全国各地から人や企業、金、情報を吸い寄せ、捉えて離さない。人口で約3割を占める地域が主要指標で高いシェアを握るメモ。

食品、洋菓子、ファッション、コーヒーなど兵庫企業は巨大市場をにらむ。

首都圏の百貨店のデパ地下を歩けば、「SO ZAI(そうざい)」「RF1」のロゴがある店に行き当たる。ロック・フィールドの展開する総菜店だ。創業したのは現会長の岩田弘三(75)。岩田は総菜を通じたビジネスモデルの発信を狙う。

レストランのオーナーシェフから身を起し、高級デリカテッセンや「神戸コロッケ」で飛躍した。健康志向の総菜が当たり、デパ地下など人気スポットの顔となった。年商490億円、従業員1500人の東証1部上場企業だ。



エーデルワイスの比屋根毅（中央）を囲んで話すツマガリの津曲孝（左）、ムッシュマキノの牧野真一の各氏

## 広がる洋菓子文化

洋菓子の進出も目覚ましい。エーデルワイス、アンリ・シャルパンティエ、モロゾフ…。神戸・阪神間の風土にはぐくまれた洋菓子文化は東京をはじめ全国に広がっている。

アンリ・シャルパンティエを展開するシュゼット（西宮市）は2015年、結婚式場など受付に飾る観賞用の「ウエルカムケーキ」を発売。東京・銀座の旗艦店でお披露目した。創業者は蟻田尚邦（故人）。1969年、荳屋にアンリを開業し、国内有数の洋菓子ブランドに育てた。生前、ブランド戦略を常に考えていた。信用の象徴であり、富の源泉。店舗、パッケージ、味…。「オーセンティック（本物）とは何か」と問い直した。「エルメスやルイ・ヴィトンなど時を経て生き延びているのは、ものづくり技術のある企業だ」。デザインを意識した丁寧なものづくり。そこに未来を見いだした。



アンリ・シャルパンティエの創業者・蟻田尚邦氏（故人、2007年）



結婚式を演出する観賞用「ウエルカムケーキ」＝東京・銀座、「銀座メゾン アンリ・シャルパンティエ」

エーデルワイスは沖縄・石垣島出身の比屋根毅（78）＝現会長＝が創業。15歳で島を出て、大阪、尼崎の洋菓子店で働いた。「超一流の技術者になる」。名人を訪ね、デコレーションを学び、作品をコンテストに出した。1966年に尼崎・立花で店を開いてからも、技術者たちに「職人魂」を説き続けた。

西宮のツマガリ、大阪・豊中のムッシュマキノ、尼崎のショウタニ、川西のファクトリーナカタ…。いずれも比屋根が育てた職人たちが独立した。みな若き日にエーデルワイスに入り、菓子作りの基礎から人生哲学まで、厳しくたたき込まれた。

## 東京から世界へ

セルフ式うどんチェーン「丸亀製麺」などを展開するトリドール（神戸市中央区）は2015年9月、東京本部を設けた。今後5年で首都圏に300店を出す。1985年、加古



本社機能の一部移転を発表するトリドール社長の栗田貴也氏（中央）

# ベンチャーたちの時代

—兵庫がはくくんだ進取の精神—

戦後の神戸から「流通革命」を起こしたダイエーの中内功氏（故人、1995年）



川市で創業し、2006年に上場した。社長の栗田貴也（54）が丸亀製麺に次ぐ世界ブランド化を目指すのが、欧米でアジア料理を提供するファストフード店だ。海外展開を加速させるため今後3年間で10億円を投じ、企業の合併・買収（M&A）にも取り組む。栗田は「東京から外食企業世界トップ10入りを目指す」と力を込めた。

## 原点の系譜

戦後の兵庫・神戸は数々のベンチャー経営者を生んだ。ダイエー創業者中内功（故人）、そしてアシックスの鬼塚喜八郎（故人）、ノーリツの太田敏郎（88）、田崎真珠（現TASAKI）の田崎俊作（故人）ら枚挙にいとまがない。

2007年、鬼塚、太田、田崎に元町の高架下に集まってもらった。「懐かしい」。3人の目に映ったのは、庶民の熱気が渦巻いた戦後の闇市の残像だった。

太田と田崎は、広島・江田島にあった海軍兵学校出身だ。一方、陸軍士官だった鬼塚も復員後、神戸に来た。取材時、80歳前後とは思えない歩調で歩く経営者らの姿から、若き日、高架下で走り回った様子が浮かんだ。半世紀の歲月は街のたたずまいを変えた。鬼塚、田崎はこの世を去った。そのDNAは次の世代に受け継がれている。

中でもダイエーを起こした中内の人生はひとさきわ鮮烈だ。灼熱のフィリピン戦線から生還した中内は、神戸の闇市で商売を覚え、高架下で薬局を開いた。1957年に大阪・千林で「主婦の店ダイエー」1号店を開業。圧倒的なエネ

ルギーで流通革命を巻き起こし、巨大流通帝国を築き上げた。

しかし、バブル崩壊後の日本経済の低落で拡大路線が重荷となり、経営が次第に悪化。2004年10月、巨額の負債を抱えたダイエーは、産業再生機構の支援を受けることを決めた。翌年8月末、中内は神戸で倒れ、9月に世を去った。奇しくも戦後60年の年だった。

焼け跡の神戸で生まれたベンチャーの星たち。若者たちは失敗を恐れず名もなき道を切り開いてきた。スーパーマーケット、スポーツ用品、風呂、真珠、洋服、食品……。若者たちが夢をかけて追求したものは、人々の暮らしに密着した「生活文化産業」に結実した。21世紀の兵庫・神戸から、どんな経営者が生まれるのだろうか。（敬称略）

（引用・参考文献）

神戸新聞連載「二極集中 光と影 東京vs兵庫」

神戸新聞連載「兵庫人 第一部 経営者列伝」

2015年12月  
2007年04月

## メモ

### 進む一極集中

「地方創生」の掛け声をよそに、東京が一人勝ちの様相を呈している。2014年の人口移動報告によると、東京圏は19年連続で転入者が転出者を上回る「転入超過」となり、その数約11万人。名古屋圏（岐阜、愛知、三重）と大阪圏（京都、大阪、兵庫、奈良）は2年連続で転出超過。兵庫も約7千人の転出超過で全国で3番目に多い。